

## 初等教育における教育目的と音楽ジャンルの関係

森 保 尚 美\*

(2022年11月30日 受理)

### Relationship between Educational Objectives and Genres of Music Materials in Elementary School

Naomi MORIYASU\*

This study examines the relationship between educational objectives and music genres as prescribed for elementary education and clarifies what knowledge per music genre is required for classes.

Two questions are posed in this research: Is there a relationship between the educational goals of elementary school music classes and music genres, and what are the knowledge items related to the music genre needed for the lesson?

Therefore, I examined the literature in musicology on genre theory and analyzed the target language of current textbooks through text mining. Based on the examination, the following three facts were clarified. (1) Educational goals are related to genre and style. (2) The knowledge of the genre necessary for the lesson includes the characteristics and social meaning of the musical style. (3) It is useful for teachers to understand and select teaching materials and for children to recognize the diversity of music.

**Keywords:** Materials 教材, Genres ジャンル, style 音楽様式, lesson study 授業研究

#### 1. はじめに

小学校音楽科の授業は、児童の実態を起点に、学習指導要領に示された教科目標をふまえ、各教科の指導内容（指導事項）に沿って本時の目標を設定しながら実施されていることが多い。

教科書会社は、学習指導要領に準拠して教材を吟味し、教育目標と教材や音楽活動を関連させながら紙面を構成している。現行の小学校音楽科における教科用図書（音楽の教科書）には、表現教材や鑑賞教材として、歌唱曲や郷土民謡、クラシック曲などが掲載されている。教科書には、各教材に対して音楽系ショップで見かける音楽の特性に基づいたジャンル名（ポップス、ジャズ、クラシック音楽、ラテン音楽、現代音楽）の区分や説明はほとんど見られない。教科書では学習指導要領上に示された文言にあわせて「日本の音楽」「郷土の音楽」「世界の音楽」等、発祥地域に基づいた分類名が使用されてい

る。学習指導要領で発祥地域に基づいた分類を示す理由は、ジャンル区分が流動し、変化する性質があるからであろう。約10年のサイクルで変容する教科書には、発祥地域に基づく分類の方が適切と判断したのではないかと推測できる。一方で、ジャンルにフォーカスしないことは、児童の日常生活を取り巻く音楽との関連や、曲種の個性を認識する上では不便である。また、ジャンルの特性に対する授業者の意識が希薄になる。ジャンルの特性を知ることは、目的にあわせた教材選択や、指導方法の工夫のために必要である。

#### 2. 研究の目的と課題設定

本研究の目的は、初等教育における教科書中に示された教育目的と音楽ジャンルの関係を調べ、授業に必要な音楽ジャンルの知識はどのようなものかを明らかにすることである。本研究の問いは、第1に「初等音楽科教育における教育目的と音楽ジャンルに関係があるのか」第2に「授業に必要なジャンルの特性に関する知識は何か」

\* 広島女学院大学人間生活学部児童教育学科教授

ということである。

### 3. 教育目標及び指導内容と方法の関係

現行の学習指導要領における音楽科（全学年）の教科目標は（１）知識及び技能（２）思考力、判断力、表現力等（３）学びに向かう力、人間性等として、文部科学省が示した資質・能力の柱に基づいて３項目で構成されている。また、目標は「教科目標」だけでなく、低学年・中学年・高学年の３区分による「学年目標」があり、学年目標は教科目標の下位項目に位置づく。

音楽科の指導内容は、「表現」「鑑賞」の２領域があり、表現領域には「歌唱」「器楽」「音楽づくり」の３分野がある。さらに２領域に共通する指導内容を「共通事項」として整理し、音色やリズムなど音楽を形づくっている要素や、反復や変化など音楽の仕組みが示されている（小学校学習指導要領解説音楽編平成29年6月）。そして、音楽科の指導方法は「内容の取扱い」として低中高学年ごとに例示されている。音楽教育の内容や方法を俯瞰すると、「表現」と「鑑賞」の領域区分は世界共通ではない。また、共通事項に示された音楽的要素や音楽様式も絶対的なものではない。日本だけを取りあげても、児童の声域の発達段階と関連づけられた指導法が明示されていた過去がある等、史的変遷がある。

現在の学習指導要領では、指導方法は「内容の取扱い」の項で２学年ごとに学年実態の傾向と関連づけて例示されている。音楽科（全学年）の目標は以下の通りである<sup>1)</sup>。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- （１）曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- （２）音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- （３）音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

文部科学省が現在全教科で重要視しているのは教科の見方・考え方である。各教科の学習を通して習得した力も、転移可能で応用可能な資質・能力として、将来的な効力を生みだすことを志向している。これを受けて小学校では長期的な展望をもちながら、今の実態をふまえた本時の授業目標を逆向きに設計することが多い。

### 4. ジャンルと教材研究

#### （１）ジャンルについて

ラテン語の“genre”は、元来博物学の用語として用いられた後、詩や戯曲や小説など文芸分野の区分や芸術全般に適用されるに至り、しばしば文体や様式の意味に使われている（竹内編、1974）<sup>2)</sup>。音楽学者の解説によれば、各ジャンルがカバーする範囲や意味は、地域や時代やイデオロギーなどの背景によって異なる（川本、2022）<sup>3)</sup>。具体的には、アメリカやイギリスは米英に流通する音楽を「ポピュラーミュージック」と呼ぶのに対して、米英以外の国々の音楽を「ワールドミュージック」と呼んでいたが、日本では、アメリカやイギリスの音楽を「洋楽」、日本の音楽を「邦楽」、それ以外の国々の音楽を「ワールドミュージック」と呼んでいた例が挙げられている。また、ジャズはポピュラー音楽なのか、クラシック音楽なのか等解釈が分かれている例も挙げられている。しかし、川本は、あいまいさをもちながら、慣習として一定期間、人々が様々な側面においてまとまりをもっていると感じる音楽のあり様に目を向けることで、音楽的多様性について理解が深まると述べている。さらに、「ジャンル」という枠を超えて、一つ一つの「スタイル」の関係性について論じることが音楽を研究する上で重要だとしている。

#### （２）先行研究

音楽教育学の立場から、音楽科教材のジャンルに直接言及している先行研究として、津田・儀間（2000）の研究がある<sup>4)</sup>。この研究は1998（平成10）年の音楽鑑賞共通教材廃止の背景とその意味を探り、音楽鑑賞指導の方向性を示唆した研究である。津田らは鑑賞共通教材が設定された昭和33年から平成元年までの鑑賞共通教材のジャンルを西洋音楽と日本音楽に分けてカウントし、さらに鑑賞教材として指定された西洋音楽の時代区分も行った（グラフ1、グラフ2）。

津田らは、戦後の日本において、西洋文化に触れる機会がない日常生活のなかで、学校教育が優れた音楽作品に触れる経験を提供してきた意味を支持した上で、文化遺産の伝達としてミニマムに教養を大切にする音楽鑑賞の姿を保障しつつ、子どもを取り巻く環境の変化に応じ、地域と連携したアクティブな音楽鑑賞活動の展開等を提案している。20年以上経たない現在「アクティブ・ラーニング」として通用する言説であったと言える。

また、竹井（1996）は、イギリスの音楽教育学者で音楽的発達過程の系統性を発表したキース・スワンウィックの研究に照らして、ポピュラー音楽及び現代音楽の学校教育への採用提案を行っている<sup>5)</sup>。中山（2015）は、

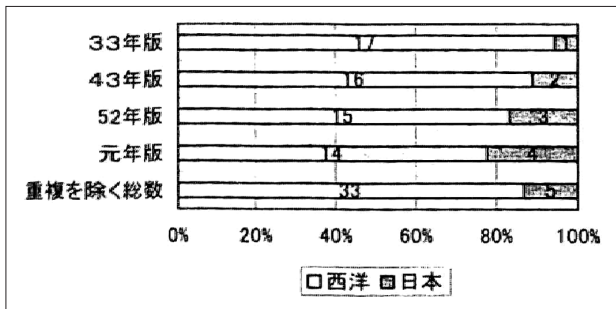


図1 鑑賞共通教材の区分 (津田・儀間, 2001)

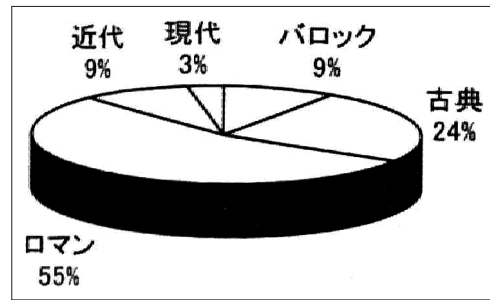


図2 西洋音楽鑑賞共通教材作曲家年代区分 (津田・儀間, 2001)

<p>A 社 6 年</p> <p>《越天楽今様》慈鎮和尚 (1155-1255) 作歌 日本古謡／鹿野要編曲</p> <p>目標／<u>私たちの国の音楽：雅楽の旋律を味わって歌おう</u></p> <p>※雅楽の演奏 (管弦) 写真掲載, 三曲合奏例 (こと・三味線・尺八) 写真掲載</p> <p>B 社 6 年</p> <p>《越天楽今様》慈鎮和尚 (1155-1255) 作歌 日本古謡</p> <p>目標／<u>日本に古くから伝わる音楽に親しみましょう</u>：日本に古くから伝わる歌の特徴を感じ取って歌いましょう。</p> <p>※参考／日本の古典芸能</p> <p>雅楽の演奏 (管弦) 写真掲載, 雅楽・能・狂言の写真と解説, 音楽史年表掲載</p>
---

図3 雅楽教科書掲載例

授業者が「今の歌も歌い、昔の歌も歌う、という姿勢を打ち出す」ことが高学年の心を開き、抵抗なく声を出す環境につながると述べている<sup>6)</sup>。

現代社会を見渡せば、コロナ禍の影響をうけてメディアが一層生活の一部になり、日本語指導が必要な児童の割合が高まっている学級実態が立ち現れている。音楽教育の立場から教材ジャンルに焦点をあてることは、授業者にとっても学習者にとっても必要である。筆者の既出研究に「時代やジャンルをまたぐ鑑賞題材の検討一題材構成の要因に着目して一」(2017)がある<sup>7)</sup>。時代やジャンルをまたいで比較鑑賞を行った授業事例から、題材構成の柔軟性と多様化を主張し、教材の時代とジャンルの拡大を取り入れる指針を示唆した。本研究は、鑑賞教材に関わらず表現教材も含めて、教育目的と教材ジャンルについて捉え直すものである。

### (3) ジャンルから見た教科書教材例

本研究におけるジャンル名として使用するカテゴリは、小学校の教育課程において現行教科書(2社)中にとりあげられた音楽から帰納的に導いたものである。ま

た、ジャンルの定義は新編音楽中辞典(音楽之友社)から引用したものである。図3～10の教科書掲載例は、教科書本文に掲載された目標と作詞・作曲者名(生没年は筆者の追記)である。目標の引用には下線をつけ、下位目標や行動目標が記されている場合はそれも記載している。写真、図、解説などの紙面の状況説明(※)は、筆者の記述によるものである。

#### 1) 雅楽・近世邦楽(器楽)

雅楽は、宮中や社寺などに転生されている古代からの伝統をもつ楽舞である。701年の大宝律令制定時には雅楽寮と呼ばれる機関が存在していたことが確認され、雅楽寮が日本の雅楽の原点とされる。こうした、平安時代の主流を形成する伝承のほかに、平安時代の末から中世以降に地方へも広く伝播した雅楽がある<sup>8)</sup>。

教科書に掲載されている雅楽は「越天楽今様」で、共通教材曲として指定されている。図3は雅楽の教科書掲載状況である。邦楽は、広義には日本音楽のすべてをさす(アイヌや沖縄の音楽は除く)、狭義には箏曲、三味線音楽などの近世邦楽をさす場合が多く、本論文でも近

A 社 6 年  
《春の海》1929年作曲 宮城道雄（1894-1956）  
目標／日本の楽器の音色を味わってきこう  
※ことと尺八の写真と解説掲載 作曲家紹介あり  
B 社 5 年  
《こと独奏による主題と 6 つの変奏『さくら』より 藤井凡大（1931-1994）  
目標／日本の楽器に親しみましょう  
※ことの写真と解説掲載、

図 4 邦楽教科書掲載例

A 社 1 年  
《ひらいたひらいた》  
目標／うたにあわせておはなになってあそぼう：どんなうごきやうたいかた  
があうかな  
※遊びの写真掲載，楽譜掲載  
《おちゃらか》《なべなべ》  
目標／わらべうたであそぼう：うたいながらうごきをあわせてあそぼう  
※遊び方掲載 楽譜なし  
B 社 1 年  
《ひらいたひらいた》（pp10-11）  
目標／みんなであそびながらたのしくうたいましょう  
※遊び方掲載，楽譜掲載  
《さんちゃんが》絵描き歌，  
《おおなみこなみ》縄跳び歌  
目標／わらべうたをさいたりうたったりしてあそびましょう：あそびかたを  
おぼえてみんなでたのしみましょう  
※遊び方掲載楽譜なし  
《おちゃらかほい》手合わせ唄  
目標／ともだちといっしょにあそびながらうたいましょう：いろいろなはや  
さで，手あそびをしながらうたいましょう  
※遊び方掲載，楽譜掲載

図 5 わらべうた教科書掲載例

世邦楽例を取り上げる（図 4）。

## 2) わらべうた

子どもの遊び歌、子どもの日常生活である遊びのなかで創造・継承される音楽である。樋口（2002）は、わらべ歌は音楽や歌という意識が希薄であり、民俗のもつ基本的な音楽感覚がストレートに旋律のなかに表出されるため、各民族の音楽要素を知るための最良の音楽であるという<sup>9)</sup>。掲載例を図 5 に示した。

## 3) 唱歌

唱歌の語義は広範囲にあり、「歌うこと」や学制発布時

の「教科目名」，「教会教育」など史的に多様性が認められる。本研究では海老澤敏・上参郷祐康・西岡信雄・山口修が監修した新編音楽中辞典に即して「1872年の学制頒布から1941年に芸能科音楽に改編されるまで学校教育で行われた教材用の短い歌」<sup>10)</sup>のうち現行教科書中で「文部省唱歌」と明記されている曲と，全学年で24曲が指定されている「共通教材」を取り上げる。共通教材のうち，雅楽，日本民謡，わらべうたは本稿で別区分にしているために除く。図 6 は掲載例である。



<p>A 社 2 年</p> <p>《虫のこえ》</p> <p>目標／<u>ようすを歌であらわそう</u></p> <p>※楽譜掲載，作者名なし，秋の風景イラスト，秋の虫写真掲載</p> <p>《かくれんぼ》文部省唱歌，林柳波作詞，下総皖一作曲</p> <p>目標／<u>かくれんぼの歌であそぼう</u></p> <p>※楽譜掲載，作者名あり，かくれんぼイラスト，よびかけっこ図譜掲載</p>	<p>B 社 2 年</p> <p>《虫のこえ》</p> <p>目標／<u>かしのかんじを生かしてうたいましょう：いろいろな虫たちがいない</u> <u>いるようすを思いうかべながらうたいましょう。</u></p> <p>※楽譜掲載，作者名なし，秋の風景イラスト，秋の虫写真掲載</p> <p>《かくれんぼ》文部省唱歌，林柳波作詞，下総皖一作曲</p> <p>目標／<u>かくれんぼであそんでいるようすをおもいうかべながらうたいましょ</u> <u>う：よびかけあっているようにうたいましょう。</u></p> <p>※楽譜掲載，作者名あり，かくれんぼイラスト</p>
--	--

図 6 唱歌教科書掲載例

#### 4) 民謡

民衆の日常生活のなかから自然に生まれ、民衆のあいだで長く歌いつがれ、その土地の人々の生活感情を反映した歌謡である<sup>11)</sup>。現行教科書では、日本人の生活からうまれた日本民謡の多くが4年、5年の教材として掲載されている(図7)。本研究では外国民謡に日本語歌詞がつけられたものであっても民謡ととらえる。

#### 5) 合唱曲

合唱は、集団で歌われ、パートが複数ある音楽形態を指す。合唱することを想定して創られた曲が合唱曲であり、ジャンルではないが、小学校教科書においては、児童が集団で歌ったり、楽器とあわせて歌ったりすることを想定して教科書用に作曲された曲や、外国曲を編曲して創られた曲、旋律を重ねて歌う曲が3年生以上の学年に多数掲載されているためジャンルとして取り上げた。本稿では主旋律を重ねたパートが楽譜にあれば、部分的であっても合唱曲として例示する。掲載例を次頁図8に示す。

#### 6) クラシック音楽(器楽曲)

クラシック音楽とは、西洋芸術音楽の総称で、ポップスや民謡など相対するジャンルである。狭義には西洋芸術音楽のなかでも古典派音楽(バロックとロマン派の間の18世紀半ばから19世紀初頭にいたる時代の音楽)という説もある。本稿の分析では、クラシック音楽の範囲からミュージカルの音楽《サウンド オブ ミュージック》(目標：いろいろな歌の表現を楽しもう)やラテン音楽

《ラ クンパルシータ》、ジャズ《L-O-V-E》を除いた、歌劇「魔笛」は含めた。図9、10は掲載例である。

目標文言は全体を通して「遊ぶ」「楽しむ」「味わう」「楽しむ」「親しむ」「感じる」「歌う」などの情意的な行動目標を示しながら、響きや重なり、曲想の変化や旋律の繰り返しなどの聴取目標が形容詞や形容動詞等で表現されている傾向があった。また、わらべうたでは「遊ぶ」、唱歌では「思いうかべる」など、ジャンルごとに特徴的なキーワードがみられた。次項では学年をこえてジャンルごとにテキストマイニングによる解析を行う。

### 5. 教科書分析—教育目的とジャンル

#### (1) 分析対象

令和2年発行現行教科書(小学校児童用)全2社

#### (2) 分析方法

児童用教科書の目次を除く本文の目標文言を1)「雅楽・近世邦楽(器楽)」2)「わらべうた」3)「唱歌」4)「民謡」5)「合唱曲」6)「クラシック音楽(器楽曲)」ごとに、ユーザーローカルテキストマイニングツール(<https://textmining.userlocal.jp/>)で分析する。2社の文言を合わせて解析する。1)～6)の出現状況にあわせて学年を区分して分析する。スコアが高い単語を複数選出し、その値に応じた大きさを図示する「ワードクラウド」と、文章中に出現する単語のパターンが似ているものを線で結んだ「共起キーワード」を通して考察する。テキスト入力にあたっては、同一語句について、ひ

<p>A 社 4 年</p> <p>《ソーラン節：北海道民謡》きたかみじゅん編曲</p> <p><u>目標／伝えられてきた歌を楽しもう：ソーラン節にぴったりの歌い方を見つけよう</u></p> <p>※楽譜掲載 ソーラン節音階掲載，歌い手と合いの手に分かれた歌い方図示</p> <p>《秩父屋台ばやし：埼玉県》《葛西ばやし：東京都》</p> <p><u>目標／おはやしのリズムを楽しもう</u></p> <p>※おはやし太鼓や鉦のリズムパターン，しょうが（奏法を表す言葉）掲載</p> <p>参考／日本のお祭りを尋ねて（24地域）</p>
<p>B 社 4 年</p> <p>《こきりこ：富山県民謡》</p> <p><u>目標／ちいきにつたわる民謡をきいたりうたったりしましょう</u></p> <p>※採譜（鹿谷美緒）掲載 踊りとお囃子の写真掲載，使用される日本楽器イラスト掲載（こきりこ，びんざさら，たいこ，笛，ほうざさら，くわがね，つづみ）発展／ちいきにつたわる音楽を調べよう インタビュー例掲載</p>
<p>B 社 5 年</p> <p>《津軽じょんがら節：青森県民謡》《ていんさぐぬ花：沖縄民謡》</p> <p><u>目標／日本の楽器に親しみましょう</u></p> <p>※三味線の写真と演奏場面，楽器解説掲載</p>

図 7 民謡教科書掲載例

<p>A 社 3 年</p> <p>《この山光る》阪田寛夫作詞ドイツ民謡，橋本龍雄編曲</p> <p><u>目標／きれいなひびきで生き生きと歌おう</u></p> <p>※ハ長調 最低音一点ハ（ド） 最高音二点二（高いレ）全24小節</p> <p>音が順次進行するフレーズと跳躍するフレーズを比べ，それぞれの旋律をどのように歌うか考えて表現を深めることを促す道筋マップが掲載されている。</p> <p>4 小節×2 回，上下パートに分かれていて両パートの歌い始めは同じ音程で始まり，途中で6 度音程に分かれて重なっている。</p>
<p>B 社 3 年</p> <p>《歌おう声高く》花岡恵作詞／長谷部匡俊作曲</p> <p><u>目標／せんりつの重なりを楽しみながら，歌ったりきいたりしましょう：互いの歌声をきき合いながら歌いましょう</u></p> <p>※ヘ長調 最低音一点ホ（ミ） 最高音二点二（高いレ）全20小節，後半の8 小節が上下パートに分かれており，3 音で構成されたオスティナートが主旋律に重ねられている。</p>

図 8 合唱教科書掲載例

らがなや漢字表記を統一した。紙面の関係で共起キーワード図は一部のジャンルのみ掲載している。

### （3）解析結果と考察

ワードクラウドの字の大きさはスコアの高さと比例し

A 社 5 年

《組曲「カレリア」から「行進曲風に」》シベリウス（1865-1957）

目標／オーケストラのひびきを楽しもう

※オーケストラの楽器群（弦楽器，木管楽器，金管楽器，打楽器）の写真とオーケストラの配置例が掲載されている。

B 社 5 年

《アイネクライネナハトムジーク 1 楽章》 モーツァルト (1756-1951)

目標／いろいろな楽器の音が重なり合うひびきを味わいながらききましょう。

※弦楽合奏の写真と、いろいろな重なり方を示すイラスト（全員が同じ旋律・主な旋律と伴奏・互いに呼びかけ合うような重なり方）が旋律図で掲載されている。

図9 クラシック曲掲載例①

A 社 6 年

《交響曲第5番「運命」第1楽章から》ベートーベン (1770-1827)

目標／思いを生かした表現のみりよくを感じ取ろう

※指揮者写真，作曲者イラスト，オーケストラ配置図，冒頭スコア，楽  
器群挿絵掲載

B社6年

《木星》ホルスト (1874-1934)

目標／オーケストラのひびきを味わいながらききましょう。

※オーケストラ写真, 主な旋律ア (①②③④) イ (⑤) の楽譜掲載

《ハンガリー舞曲第5番》ブラームス（1833-1897）（シュメリング編曲）

目標／曲想の移り変わりを味わいながらききましょう.：旋律のくり返しや変化に気を付けてききましょう.

※2拍子の指揮図掲載、短調と長調の部分にわけて各8小節の楽譜掲載  
3名の指揮者の指揮シーンの写真掲載

図10 クラシック曲掲載例②

ている。また、品詞で色分けがされている。同一単語が関連する単語の近くに配置されるため、複数回出現することがある。

1) 雅楽・近世邦楽 (器楽)

雅楽や近世邦楽は、1 学年から 3 学年の教科書には掲載されていなかったため、第 4 学年から第 6 学年の結果を示す。教材曲は《越天楽今様》《春の海》《こと独奏による主題と 6 つの変奏「さくら」より》等である。

旋律や音色に親しんだり、音色を感じ取ったりする語句の出現率が高い。三味線や箏、三線、雅楽で用いられる楽器は身近ではないため、学びの入り口としてこのような目標文言が現れているものと考察する。また、オーケストラ曲に比べて、重なり合う音の数が少ないため、旋律重視の目標がたてやすいと考えられる(図11)。

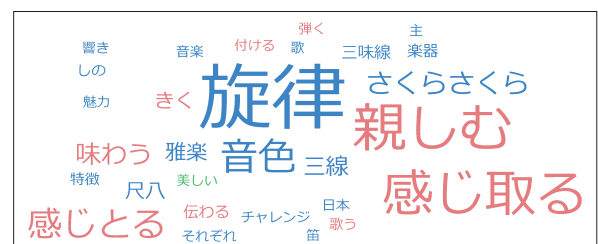


図11 雅楽・近世邦楽曲の目標解析

2) わらべうた

両社とも第4学年から第6学年までの教科書にはわらべうたが掲載されていなかったため、第1学年から第3学年の結果を示す(図12).

わらべうたは、音構成が単純で、音数も少なく、遊びを伴うルーツがあるため3学年までの教科書に多く取り

入れられている。目標文言に「わらべうた」という言葉がそのまま使用されている頻度が高く、わらべうた以外の曲とジャンルを区別する意図をくみとることができる。また、「遊び方」を目標に示して遊びを通して学習することが目標によって促されていることがわかる。

### 3) 唱歌

教科書中に「文部省唱歌」(1872年～1941年までの官製教科書のいずれかに掲載されていた曲)と示されている曲は、学習指導要領で指定された共通教材曲と完全一致しているわけではない。

現行教科書に「文部省唱歌」の記載があり、かつ、共通教材に指定されている歌は以下の通りである。

- 1 学年 《かたつむり》《うみ》《ひのまる》
- 2 学年 《かくれんぼ》《虫のこえ》《はるがきた》
- 3 学年 《春の小川》《茶つみ》《ふじ山》
- 4 学年 《まきばの朝》《もみじ》
- 5 学年 《こいのぼり》《冬げしき》《スキーの歌》
- 6 学年 《おぼろ月夜》《われは海の子》《ふるさと》

「文部省唱歌」の記載がない「共通教材」は、わらべうた《ひらいたひらいた》、日本古謡《うさぎ》《さくらさくら》《子もりうた》《越天楽今様》、中村雨紅作詞／草川信作曲《夕やけこやけ》、葛原しげる作詞／梁田貞作曲の《とんび》である。

唱歌の目標文言には、全学年を通じて「うかべる」という言葉が頻出している。共起キーワード図によれば「思う」と「様子」と「うかべる」の3つの単語が三角形の太い線で結ばれ、強い結びつきを示していた。下学年では「よびかける」等、日常用語が目標に表れ、上学年では「旋律」「曲想」など音楽用語が目標に表れていることがわかる。唱歌は、自然や景色、生き物がテーマになっている曲が多いため、情景や様子を思いうかべながら歌うための目標文言が多く設定されているものと考察できる(図13, 14)。

### 4) 民謡

第1～第3学年までの教科書に鑑賞教材として掲載された日本民謡は、《とうしんドロー》(沖縄県) 祇園囃子(京都府) ねぶた囃子(青森県) 神田囃子(東京都) の他、曲名のない郷土の太鼓や芸能がとりあげられていた。その他の曲はすべて外国民謡(日本語詞)であったため、下学年では外国民謡の目標文言の分析を行った(図15)。遊び歌と表記されているものは除いた。

3 学年までの教科書には、外国民謡に日本語詞がつけられた曲が多く掲載されていて、一般的には「童謡」と呼ばれている曲が多い。表1は教科書会社2社をあわせて掲載曲名と発祥国一覧で、日本民謡はわずか1 曲で

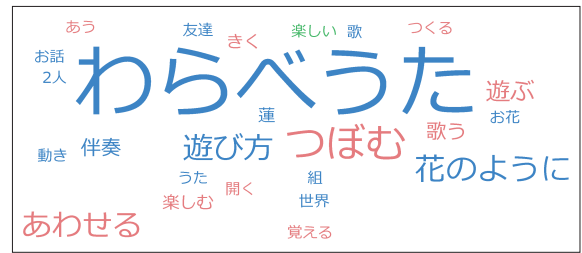


図12 わらべうたの目標解析

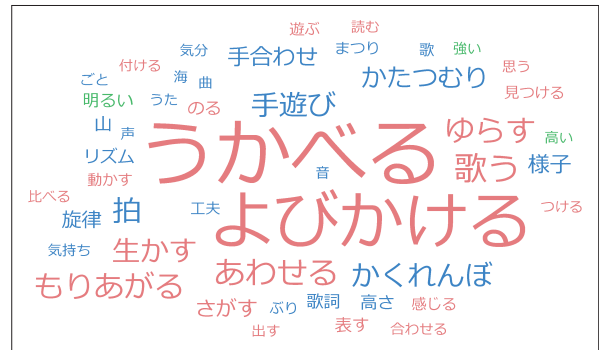


図13 唱歌の目標解析  
(1～3 学年)  
目標文言の解析

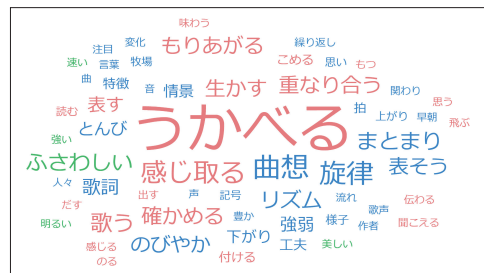


図14 唱歌の目標解析  
(4～6 学年)  
目標文言の解析

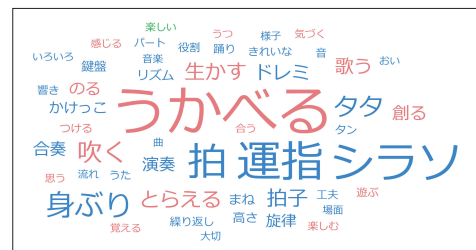


図15 民謡(1 学年～3 学年) 目標解析

あった。重複する曲も1 カウントで掲載した(表1)。

「うかべる」は、単純頻度比較では、「歌う」や「吹く」より出現回数が低い。対象テキストに特有のワードとして重みづけがされ、高いスコアになっていた。共起キーワード図では「場面」「思う」「うかべる」の3語が



表1 外国民謡掲載曲一覧（第1学年～第3学年）

学 年	曲 名	掲載発祥国名
第1学年	《ぶんぶんぶん》 《もりのくまさん》 《きらきら星》 《ちょうちょう》	ボヘミア アメリカ フランス ドイツ
第2学年	《こいぬのピンゴ》 《かえるのがっしょう》 《かっこう》 《こぎつね》 《やおやのおみせ》 《アンダルコの歌》 《ティニクリン》 《エースオブダイヤモンド》 《はしの上で》 《たぬきのたいこ》 《かっこう》 《山のボルカ》 《かねがなる》	アメリカ ドイツ ドイツ ドイツ カナダ・フランス チェコ／スロバキア フィリピン デンマーク フランス チェコ ドイツ チェコ フランス
第3学年	《ゆかいなまきば》 《ホルディリディア》 《陽気ななじや》 《雪のおどり》 《せいじゃの行進》 《冬さん、さようなら》 《アチャパチャノチャ》 《山のボルカ》	アメリカ スイス オーストリア・ドイツ チェコ／スロバキア アメリカ ドイツ ラップランド チェコ

※この山光る（ドイツ）は合唱曲に分類。

※《山のボルカ》は、教科書会社によって第2学年または第3学年に掲載されている。

強い結びつきを示していた。

特有な傾向は、「運指」「拍」「シラソ」などの語から見とることができる（図15）。外国民謡は、ヨーロッパ発祥曲が多く、西洋音階（ドレミファソラシド）によるシンプルな構造を持つ曲が多い。そのため、鍵盤ハーモニカやリコーダーなどの初学者が、ドレミで歌ったり、運指の練習をしたり、リズム打ちをして拍とリズムの関係を体得することを目指す文言が使用されていると考える。日本民謡が少ない理由として、明治時代に始まる学校音楽教育や唱歌教育が、西洋音階の教材を模範として行われていた影響や、幼少時から音感覚として親しまれている西洋音階の定着があると考えられる。筆者は、低学年の時期に伝統的な日本の音楽やアジアの音楽にも触れて音感覚を拡張したり、移民の割合の高い国の音楽に触れたりすることの教育的意義について今後も検討していく必要があると考えている。

4年から6年までの教科書には日本民謡、ブラジル民謡、韓国民謡、西インド諸島民謡、メキシコ民謡、スコットランド民謡に目標の表記があった。

また、鑑賞教材や資料として、日本民謡の曲名が50

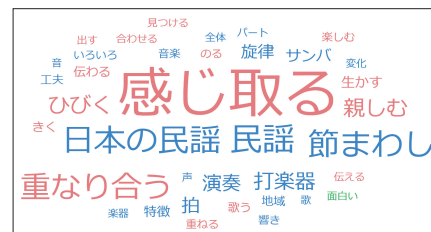


図16 民謡（4学年～6学年）目標解析

曲、47曲と、1年から3年までの掲載の少なさから一転して多く掲載されている。祭りや踊りなどの伝統芸能、器楽合奏教材も掲載されているが、見開き頁に一度に並べて掲載されている。

しかし、富山県民謡の《こきりこ節》は、2社とも個別目標を掲げ、単独でとりあげて掲載している。図16の分析は、4年から6年の民謡の目標文言の分析である。

図16（4～6学年）の民謡の目標文言は、図15（1～3学年）と異なる様相を呈している。図16はむしろ、図1の雅楽・近世邦楽に似て、「感じ取る」のスコアが高く、「節まわし」など他のジャンルにはみられない音楽用語が出現している。また図17左上図（※1）の共起状況

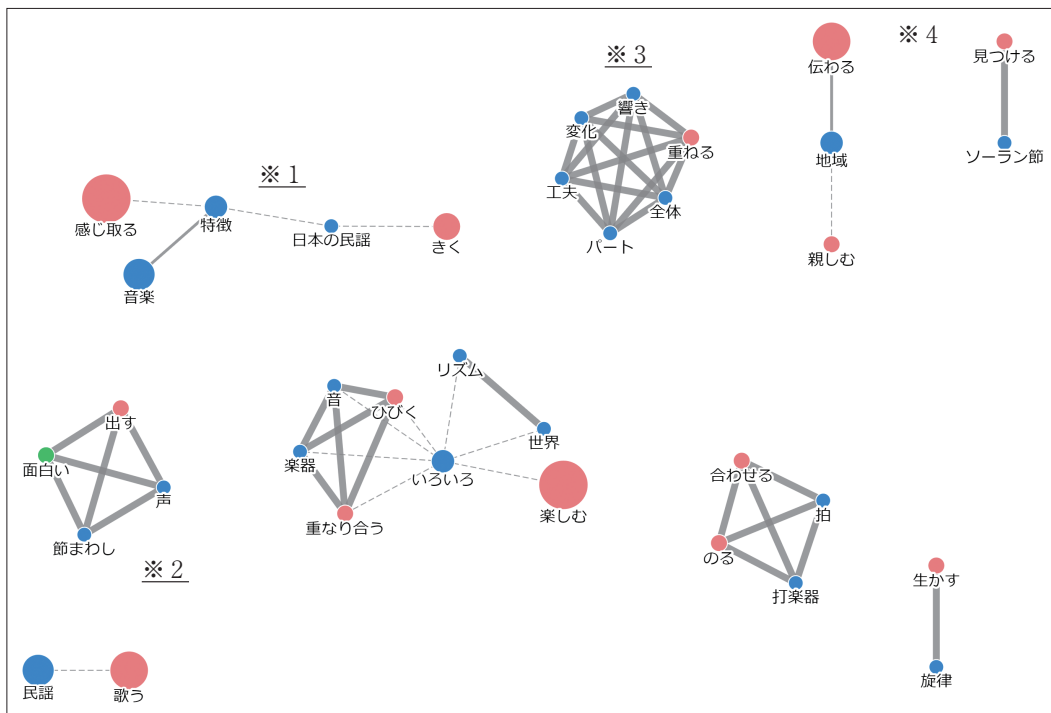


図17 民謡（4学年～6学年）共起キーワード

により、日本民謡と特徴を感じ取って聴くこと、左中央図(※2)より声の出し方の面白さと節回しに強い結びつきがあることがわかる。また、太い線の六角形で結ばれた図(※3)から、ワードを追って教科書にたちもどると、外国民謡の目標文言であった。右上図(※4)の「伝わる」という動詞のスコアが「親しむ」より高い点にも特徴があると言える。

### 5) 合唱曲

歌に楽器を重ねる教材や輪唱は3学年までに出現するが、歌を重ねる教材は4学年以上に多いため4学年から6学年の分析結果を示す。複数パートがあっても「文部省唱歌」と書かれているものは②でカウントしたため除いた。図18のように、予想通り、「重なり合う」「響き」のスコアが高い。感じ取る対象は、唱歌や民謡とは異なり曲想や変化であることが推測できる。

6) クラシック音楽 (器楽)

1～3学年のクラシック音楽は“ピンク・パンサー”や“ねこ”“ぞう”“道化師”“時計”“ひなどり”など具体的なキャラクターが出現する。また、チェロとピアノ、フルートとピアノ、バイオリンとピアノ、3本のトランペット、2本のホルンなど楽器の種類が少ない曲が掲載されていた。旋律の聴取や音色の聴取にあたって、複雑な重なりのある音楽を避けていると考えられる。図19から、楽器の音色や旋律を聴くねらいが、図20からは4学年以上において、旋律のかけ合いや重なり、より複雑なオーケストラの響きや曲の変化などがキーワードと

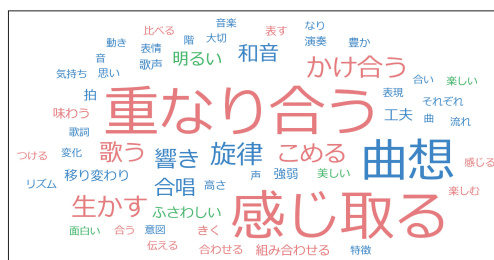


图18 合唱曲（4学年～6学年）目標解析

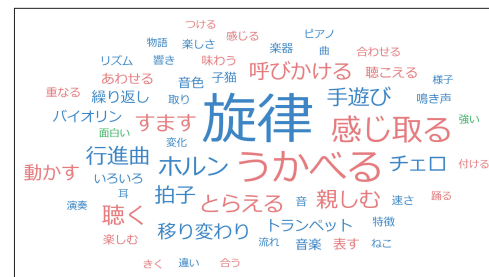


図19 クラシック音楽  
(1～3学年) 目標解析

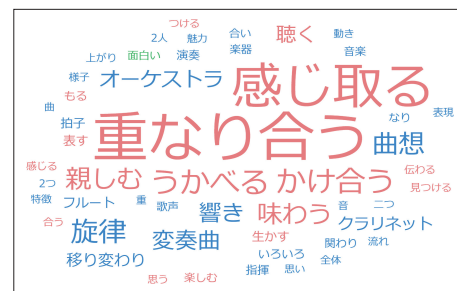


図20 クラシック音楽  
(4～6学年) 目標解析

して出現していることが分かる。

### (3) ジャンルと指導方法

#### 1) 雅楽・近世邦楽（器楽）

澤田（2008）は、文芸や舞踊など他の表現媒体と結びついている日本音楽のなかで、雅楽の管弦は、純器楽曲として数少ない存在だと述べる。雅楽の管弦は、オーケストラと同様に、管楽器→吹きもの、弦楽器→弾物、打楽器→打物から構成される。澤田は主旋律を担う箏・楽奏の習得法が、師匠の唱える唱歌（しょうが）を繰り返して模倣し、旋律を完璧に覚えてから楽器演奏に入るのが伝統的な指導スタイルであると説明する。また、主旋律の箏・楽と龍笛のフレーズの頭がぴったりと合わないことも雅楽の美しさである等、合唱やクラシック曲の美しさとは異なる日本音楽の価値観を説明する<sup>12)</sup>。阪井（2004）は、このような日本音楽の“師からまると学ぶ”学習方法と、音楽の概念を学習する方式が対極にあると述べている<sup>13)</sup>。概念学習とはまさに、現在学校で当たり前に行われている学習で、例えば音色や強弱、旋律やリズム、それらを組み合わせた音楽の形式などについての知識を音楽活動を通して獲得するように構成された学習のことで、国内外で広く取り入れられている。日本では戦後、演奏表現の質や読譜力、名作の理解を追求した時期を経て、客観的評価に耐えうる知的階層構造のあるカリキュラムが出現し現在に至っているが、音楽の構成要素もジャンルによって異なる。2008年（平成20）年に伝統文化の充実が施策として打ち出されて以降、義務教育の学習指導要領解説にも日本音楽固有の音楽的要素が追加された。

教科書指導書によれば、小学生に《越天楽今様》や《越天楽》を指導する際には、半音を含まない伝統的な日本の音階による旋律や、古くから伝わる楽器の音色や響きに浸ること、歌詞の七五のリズムを感じとらせることや、リコーダーで旋律を吹く際にタンギングをせずに箏・楽の奏法を取り入れる提案がなされている<sup>14), 15)</sup>。

令和2年発行の現行教科書（2社）で、日本音楽として教科書に掲載されている音楽には、雅楽、近世邦楽、日本民謡、日本古謡、日本歌曲などがある。

#### 2) わらべうた

本多（2020）は、わらべうたを“遊びの道具としての歌”と紹介し、音楽室で互いの歌声を聴き合っているとけ合わせようとする歌い方とは違って、遊びが楽しくて仕方ない、負けてくやしいなどの感情を伴いながら身体を動かすことの高揚感も伴う力強い歌い方になると記述する<sup>16)</sup>。筆者は実務経験を通して、わらべうたが動きをそろえたり、息を合わせたりする機能を持ち、コミュニ

ケーションを促す役割を果たすと感じてきた。

#### 3) 唱歌

大人が学校で教えることを前提として作ったルーツをもつ唱歌は、歌詞のテーマに特徴がある。郷土につたわるわらべうたのように、友達をからかったり、失敗談を扱ったりするような歌詞はみられず、身近な生き物や、日本の四季を題材にしたものがほとんどである。なかには、日本特有の美的情感を表した文語調の美しい歌詞がつけられて歌い継がれているものもある。その指導法について、金田一（2015）は、唱歌の言葉が標準語、または文語に近い口語である特徴をもち、ヨナ抜き音階を用いた少ない音数と単純な構造をもつことを挙げている。そして、題材や形式が真面目であることが魅力であるとした<sup>17)</sup>。これらの特徴は、伴奏が苦手な教員にとっても教えやすく、伝えやすいことにつながる。その結果持続可能なジャンルになったということもできるのではないだろうか。

附属小学校で教鞭をとっている平野（2015）も、20小節前後で創られた唱歌は、子どもたちが楽譜から曲を読み取っていくには最適な教材だと記している<sup>18)</sup>。楽譜を読み取る観点として、平野は10の観点「拍子、小節数、速度、初めの音、終わりの音、調性、一番高い音、一番低い音、使われている音、強弱記号、楽譜から気づいたこと」を挙げる。これらの内容は先に教示するのではない。児童が楽譜から見つけるために、曲の長さが短いことや、同じ音型が多くあること、音数が少ないこと、転調がないことが適すると言えよう。

#### 4) 民謡

財団法人日本民謡協会は民謡指導についての考え方として、伝統文化としての民謡を指導することと、同じ曲でありながら形態や表現が変化し続けている現代の芸能文化の両面を視野に入れることを推奨している<sup>19)</sup>。例えば、児童生徒の体力や感覚にスピードを合わせたり、替え歌をしたり、アレンジをしたりする試みを提案している。志民（2020）は、表現の工夫としておはやし（掛け声、合いの手）、節回し、コブシへの着目、体を通した学習、わらべうたとの共通点からアプローチする方法を示している<sup>20)</sup>。

#### 5) 合唱曲

文部省は柔らかい発声を目指して頭声発声という用語を昭和33年に取り入れた。それは、鼻腔共鳴を加えた発声法である。しかし、平成元年以降、頭声的発声を中心としながら、曲想に応じた発声の仕方を工夫する方向に変更し、現在では「呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う技能」や、「互いの歌声や

副次的な旋律、伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能」を身に付けることができるよう示している。しかし、児童に意欲はあっても指導者が練習方法を知らなければ合唱技術を習得させることはできない。『小学生のヴォイス・トレーニング』の著者橋本静一は①体の訓練②技術の訓練③心の訓練が必要と述べて、体という楽器に関する知識や母音の発声練習、発音練習などについて説明している。合唱は大集団で奏でる芸術として近現代の学校にマッチングするジャンルであったと考える<sup>21)</sup>。

## 6) クラシック音楽

ここではクラシックコンサートの分析から音楽教育教材の選択に言及した茂木（2016）の知見を述べる。茂木に寄ればクラシック音楽には集中的な聴取が必要であり、音の動きを味わったり意味を理解したり音楽の身振りの隅々を感じることで、そのよさがわかると言う。

教材選択に対しては、構成が明解なベートーベンの作品や、歌詞内容からアプローチできるアリア《私の名はミミ》などを挙げる。一方で中世のグレゴリア聖歌や日本の伝統音楽などは「音楽とは何か」を考えさせる教材として位置づけることを提案している<sup>22)</sup>。

また、高校で教鞭をとった末石（2016）は、学習者の生きる社会にある音楽を選択し、生徒の学ぶ意欲を重視した指導方法を考案する。例えば聴いたことのある《結婚行進曲》、社会的認知度や社会的評価のあるベートーベンの交響曲第5番ハ短調作品67《運命》、音楽形態の違いによる比較鑑賞が可能なガーシュインの《アイガットリズム》、意外性や驚きを喚起させ単純な構造から理解できるラヴェルの《ボレロ》などを意欲的に鑑賞させる教材として例示している<sup>23)</sup>。

各ジャンルの専門家が練り上げてきた指導法は、初等教育においても発達段階に即した応用をすれば活用できる。扱う音楽ジャンルによって指導法の要点は異なり、また同じジャンルの音楽であっても時代によって指導法を検討することが必要である。児童を取り巻く生活環境や社会環境をふまえた指導方法については、今後も議論されるべきであろう。

## 6. 総括

「初等音楽科教育における教育目的と音楽ジャンルに関係があるのか」という問いに関して、目標文言の解析から一定の関係があることがわかった。「授業に必要なジャンルの特性に関する知識はあるか」の総括を以下に述べる。

雅楽を含む日本音楽に関しては、先行研究の知見と、親しむ、感じ取るという目標文言から、丸ごと模倣する

活動や、模倣しながら創りかえる活動を促す目標文言への改善や例示が必要であると考える。

わらべうたは、遊びをもって発祥しているため、遊んでこそ深く理解できるという方法論的見解が授業に必要な知識である。現行教科書の目標文言や遊び方の例示は、教材の本質をとらえていると考える。

唱歌に関して、授業に必要な知識は、従来求められていた旋律構造理解と歌詞解釈の他に、時代背景の知識である。また、歌詞内容から情景や様子を思いうかべる目標は妥当であるが、今日では児童の生活心情と自然との関わりが希薄になっている可能性があるため、教科を超えて自然体験に基づく想像の機会を設ける工夫も要であると考える。また、作詞・作曲者の生きた時代の情景やエピソード等を想像の手立てにすることも大切である。

合唱は、響きの美しさを感じることにそのものに魅力があるため、従来通り響きのある声を求める目標を踏襲し、史的に積み上げられてきた児童合唱指導法の継承が必要だと考える。合唱の様式に関しては、ヨーデル（スイスほか）ホーミー（モンゴル）ケチャ（インドネシア）ゴスペル（アメリカ）など多様性も確保されていた。しかし児童の生活心情をふまえると、ポップス、ラップ、ミュージカルなどと合唱の発声を相対的に捉える目標も提案したい。

クラシック音楽に関する授業も、静かに聴くことが重視された戦後から様変わりし、体を使って聴きとったり、音楽の構造をアニメーションで確認したりするなど、音楽活動を伴って理解する方法が定石になっている。ダンスミュージックのように、児童がのって踊りたくなる拍の誘導はないため、授業者はリトミックなどの知見と技能の習得が求められる。また、比較的短いクラシック曲が採用されているとは言え、音楽は時間芸術であり、瞬時に消え去る。クラシック音楽の特性として集中的な聴取が必要という言説に従えば、一人一人が聴き味わう環境のために、音源を自由に操作してくり返し聴く個別端末が必要不可欠である。

## 7. おわりに

本稿では、合奏曲の教材や、音楽づくりのために用意された教材ジャンルに触れることができなかった。そして、現在はまだ掲載が少数であるが、アジア、アフリカなどの音楽に関しても、授業目標及び方法について研究し、授業開発を提案していきたい。テキストマイニングの前処理が不十分であった点は今後の課題にしたい。



## 【引用文献】

- 1) 文部科学省, 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 (音楽編), p. 9, 2017
- 2) 竹内敏雄編, 美学事典増補版, 弘文堂, p. 383, 1974
- 3) 川本聡胤, 音楽学的ポピュラー研究39—ジャンルとスタイル—, フェリス女学院大学音楽学部紀要22, pp. 1-23, 2022
- 4) 津田正之・儀間綾子, 鑑賞共通教材廃止の背景とその意味—音楽鑑賞指揮の今後のあり方をめぐって, 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 (8), pp. 85-93, 2001
- 5) 竹井成美, 生徒の音楽的発達に即した音楽教育の在り方: Swanwick. K の「音楽的発達のらせん状過程」図に照らした中学校学習指導要領 (音楽) の分析を中心として, 教育科学, 宮崎大学教育学部紀要第81号, pp. 37-45, 1996
- 6) 中山由美, うまい先生はこう教える! 小学校音楽授業マネジメント, 明治図書, p. 13, 2015
- 7) 森保尚美, 時代やジャンルをまたぐ鑑賞題材の検討, 教育学研究紀要第62巻, 中国四国教育学会, pp. 636-641, 2017
- 8) 遠藤徹, 雅楽, 新編音楽中辞典, p. 131-132, 2002
- 9) 樋口昭, わらべうた, 新編音楽中辞典, p. 788, 2002
- 10) 塚原康子, 唱歌, 新編音楽中辞典, p. 318, 2002
- 11) 塚原康子, 民謡, 新編音楽中辞典, p. 686, 2002
- 12) 澤田篤子, 雅楽, 日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽, pp. 58-61, 2008
- 13) 阪井恵, 概念学習, 日本音楽教育事典, 日本音楽教育学会, p. 212, 2004
- 14) 音楽のおくりもの6研究編 (教師用指導書) 教育出版, p. 92, 2002
- 15) 小学生の音楽6指導書 (研究編) 教育芸術社, p. 94, 2002
- 16) 本多佐保美, わらべうたの学習内容, 日本音楽を学校でどう教えるか, pp. 10-11, 2020
- 17) 金田一春彦, 童謡・唱歌の歌詞, p. 61, 2015
- 18) 平野次郎, 楽曲との出会い, 教育音楽小学版音楽之友社, p. 22, 2015
- 19) 日本民謡協会, 民謡指導マニュアル, p. 76, pp. 92-92
- 20) 志民一成, 民謡の学習内容, 日本音楽を学校でどう教えるか, pp. 18-21, 2020
- 21) 橋本静一, 小学生のヴォイス・トレーニング, 音楽之友社, p. 74
- 22) 茂木一衛, 成人の鑑賞実態から考える教材選択—コンサートの実情分析からの還元, 季刊音楽鑑賞教育 vol. 24, p. 51, 2016
- 23) 末石忠史, 「聴くことへの意欲」を高める鑑賞教材とその選び方と指導実践例, 季刊音楽鑑賞教育 vol. 24, pp. 44-46, 2016

## 【参考文献】

- 新実徳英監修「おんがくのおくりもの1」教育出版社, 2020  
新実徳英監修「音楽のおくりもの2～6」教育出版社, 2020  
小原光一監修「小学生のおんがく1」教育芸術社, 2020  
小原光一監修「小学生の音楽2～6」教育芸術社, 2020